創世記18－19章 「執り成しによる神の救い」

1A 神の友アブラハムへの現れ 18

1B 三人の御使い 1－15

1C アブラハムの給仕 1－8

2C サラへの約束 9－15

2B ソドムの見下ろし 16－33

1C 正義と公正を行う国民 16－21

2C 正しい者のゆえの憐れみ 22－33

1D 公正な裁きの訴え 22－25

2D 十人でも全て赦す方 26－33

2A ロトへの現れ 19

1B ソドムの不義 1－11

1C 旅人の安全 1－3

2C 不自然な肉欲 4－11

2B ロトの家族の逃れ 12－29

1C かろうじての救い 12－22

2C 硫黄と火の裁き 23－29

3B 父と寝る娘たち 30－38

本文

創世記 18 章を開いてください。私たちは、対照的な二人の行き先を見ていきます。一人は、アブラハムです。主は、アブラハムに、サラから男の子が生まれ、その子が約束を引き継ぐことを語られました。来年の今ごろ、イサクを産む時に契約を建てると言われました。そのことを、主の使いがそのままサラ本人にも伝えます。それとは対照的に、ソドムにいるロトが出てきます。彼は、危うく、ソドムに対する神の災いに巻き込まれそうになりました。そして、妻を失います。残された娘たちが無理やり、父と寝て、それで子孫を残すということになります。

約束の内に留まったおじアブラハムと、目の前に広がる緑を見て、世に妥協したロトとの違いです。しかし、アブラハムがロトを思うゆえに、熱い執り成しを主に立てて、彼が救われるのです。

1A 神の友アブラハムへの現れ 18

1B 三人の御使い 1－15

1C アブラハムの給仕 1－8

[1] 主は、マムレの樫の木のところで、アブラハムに現れた。彼は、日の暑いころ、天幕の入り口に

座っていた。

マムレとは、ヘブロンにある一区画です。マムレというアモリ人がいて、彼と盟友関係にありました。そこをアブラハムは、長いこと居住しています。そして、将来、ここに自分たちの墓を造ります。サラを葬り、自分自身も葬られて、イサク、ヤコブ、レアが葬られることになります。今、ヘブロンに行けば族長の墓として訪問できます。

そこの「樫の木」のところで主が現れました。日が暑いので、木陰にいることはイスラエルでは必須です。アモリ人にしろ、これから来る旅人三人にしろ、そういうところで語り合ったり、ゆったりします。それは、打ち解けた仲を示し、平和な姿を表しています。（参考：ゼカリヤ 3:10）

2 彼が目を上げて見ると、なんと、三人の人が彼に向かって立っていた。アブラハムはそれを見るなり、彼らを迎えようと天幕の入り口から走って行き、地にひれ伏した。

ヘブル人への手紙 13 章で、旅人をもてなしなさいという勧めがありますが、こう言っています。「13:2 旅人をもてなすことを忘れてはいけません。そうすることで、ある人たちは、知らずに御使いたちをもてなしました。」御使いでした。当時、いや今も中東では、旅人をもてなす文化と習慣があります。遊牧民は特に顕著です。それは、おそらく外で寝泊まりすれば、盗賊などに襲われる危険があり、守られるためにそのような習慣ができたと思われます。

しかし、アブラハムはそれ以上のことをしています。「彼らを迎えようと天幕の入り口から走って行き、地にひれ伏した」と言っています。旅人といっても、何かただならぬものを感じたのでしょう。ほとんどこれは、礼拝に近い行為です。主からの使いですから。

3 彼は言った。「主よ。もしもよろしければ、どうか、しもべのところを素通りなさらないでください。4 水を少しばかり持って来させますから、足を洗って、この木の下でお休みください。5 私は食べ物を少し持って参ります。それで元気をつけて、それから旅をお続けください。せっかく、しもべのところをお通りになるのですから。」彼らは答えた。「あなたの言うとおりにしてください。」

アブラハムの方から、かなり積極的に接近しています。彼らがここに留まり、もてなしを受けることを懇願するぐらいのことをしています。思い出すのは、エマオの村に向かう二人の弟子たちでした。イエスにこう言います。「ルカ 24:29「一緒にお泊まりください。そろそろ夕刻になりますし、日もすでに傾いています」と言って強く勧めたので、イエスは彼らとともに泊まるため、中に入られた。」そして、こう言うのです。「24:32 道々お話しくださる間、私たちに聖書を説き明かしてくださる間、私たちの心は内で燃えていたではないか。」

そうです、主との親しい時間、そして主から聞いて、心を燃やしている時間なのです。主ご自身が彼らを、わたしの友と呼ばれましたが、友としての時間です。アブラハムは、その後、預言者たちからも、また新約聖書ではヤコブの手紙でも、神の友と呼ばれます。

6 アブラハムは、天幕のサラのところに急いで行って、「早く、三セアの上等の小麦粉をこねて、パン菓子を作りなさい」と言った。7 そして、アブラハムは牛のところに走って行き、柔らかくて、おいしそうな子牛を取り、若い者に渡した。若い者は手早くそれを料理した。

三セアは、約 22 ﾘｯﾄﾙで、三人には多すぎる分量ですし、良質の子羊の肉も多すぎます。けれども、それだけのもてなしの思いなのです。

8 それからアブラハムは、凝乳と牛乳と、料理した子牛を持って来て、彼らの前に出したので、彼らは食べた。彼自身は木の下で給仕をしていた。

凝乳は、ヨーグルトのことですね。そして、先ほどの子牛の肉を持ってきます。興味深いことに、ここで乳製品と肉製品を一緒に出しています。今のユダヤ教では、これを一緒に食べては決していけないことになっています。それは、「出 23:19 あなたは子やぎをその母の乳で煮てはならない。」という掟の拡大解釈です。けれども、ユダヤ人の父祖であるアブラハムが、肉と乳の料理を一緒に出しているのですから、間違った解釈だと思います。

そして大事なのは、「彼自身は木の下で給仕をしていた」とあります。しもべに、給仕を任せないで、自分自身で行っています。これがまさに、主に礼拝する姿です。自分自身を主に献げます。「ロマ 12:1 ですから、兄弟たち、私は神のあわれみによって、あなたがたに勧めます。あなたがたのからだを、神に喜ばれる、聖なる生きたささげ物として献げなさい。それこそ、あなたがたにふさわしい礼拝です。」

2C サラへの約束 9－15

9 彼らはアブラハムに言った。「あなたの妻サラはどこにいますか。」彼は答えた。「天幕の中におります。」10 すると、そのうちの一人が言った。「わたしは来年の今ごろ、必ずあなたのところに戻って来ます。そのとき、あなたの妻サラには男の子が生まれています。」サラは、その人のうしろの、天幕の入り口で聞いていた。

もうここで、この三人が誰かが分かってきます。1 節に、主がアブラハムに現れたとあります。ヘブル 13 章から、明らかに彼らは御使いであることが分かります。しかし、その一人は、主の使いであり、主ご自身です。「わたしは来年の今ごろ、必ずあなたのところに戻って来ます」と言っているのです。この言葉は、アブラハムに主ご自身が言われたことに基づいています（17:21）。

サラについての神の約束ですが、アブラハムにだけ語っていました。けれども、主はとても優しい方です、サラ本人にも語りかけておられます。そして、彼女が祝福された女であることを確認しておられるのです。

11 アブラハムとサラは年を重ねて老人になっていて、サラには女の月のものがもう止まっていた。
12 サラは心の中で笑って、こう言った。「年老いてしまったこの私に、何の楽しみがあるでしょう。それに主人も年寄りで。」

サラも、アブラハムと同じように笑いました。どちらも更年期を過ぎていますから、子供を産むなど考えられるもなく、子供を産むための夫婦の営みもないですよということです。

13 主はアブラハムに言われた。「なぜサラは笑って、『私は本当に子を産めるだろうか。こんなに年
をとっているのに』と言うのか。14 主にとって不可能なことがあるだろうか。わたしは来年の今ごろ、
定めた時に、あなたのところに戻って来る。そのとき、サラには男の子が生まれている。」15 サラは
打ち消して言った。「私は笑っていません。」恐ろしかったのである。しかし、主は言われた。「いや、
確かにあなたは笑った。」

主は、心の中をすべてお見通しですね。（マル 2:6-8 参照） そして、主は、サラを優しく戒めます。「主にとって不可能なことがあるだろうか。」そうです、主は、信じる者に働く全能の力を、サラを通して証しされたのです。また、死んでもよみがえる、復活の力をあかしされたのです。エペソの人たちにも、パウロは祈りました。「エペ 1:19-20 また、神の大能の力の働きによって私たち信じる者に働く神のすぐれた力が、どれほど偉大なものであるかを、知ることができますように。20 この大能の力を神はキリストのうちに働かせて、キリストを死者の中からよみがえらせ、天上でご自分の右の座に着かせて、・・・」

2B ソドムの見下ろし 16－33

場面が変わります。親しい御使いたちとの語らいの場から、彼らはソドムに目を向けます。

1C 正義と公正を行う国民 16－21

16 その人たちは、そこから立ち上がって、ソドムの方を見下ろした。アブラハムは彼らを見送りに、
彼らと一緒に行った。

今、ヘブロンにいます。そこはユダ山地の中でも高いところにあります。そこから、ヨルダン渓谷の低地、また死海方面を見ますと、見下ろす感じになります。

17 主はこう考えられた。「わたしは、自分がしようとしていることを、アブラハムに隠しておくべきだろ

うか。

ここです、主は、アブラハムを友としていることが分かります。「隠しておくべきだろうか」という言葉からです。普通、人には言えない事も、友には打ち明けますね。「イザ 41:8 だがイスラエルよ、あなたはわたしのしもべ。わたしが選んだヤコブよ、あなたは、わたしの友アブラハムの裔だ」とあります（その他、Ⅱ歴代 20:7、ヤコブ 2:23）。

主は、捕えられる前に弟子たちに語られます。「ヨハ 15:14-15 わたしが命じることを行うなら、あなたがたはわたしの友です。15 わたしはもう、あなたがたをしもべとは呼びません。しもべなら主人が何をするのか知らないからです。わたしはあなたがたを友と呼びました。父から聞いたことをすべて、あなたがたには知らせたからです。」弟子であることの恵みは、ここにあるでしょう。主イエスが、ご自身の心に思っておられることを、私たちに明かしてくださる、ということです。

18 アブラハムは必ず、強く大いなる国民となり、地のすべての国民は彼によって祝福される。19 わたしがアブラハムを選び出したのは、彼がその子どもたちと後の家族に命じて、彼らが主の道を守り、正義と公正を行うようになるためであり、それによって、主がアブラハムについて約束したことを彼の上に成就するためだ。」

これが、主が考えておられたことです。すでに、アブラハムに約束を与えておられました。けれども、それには目的があり、「彼らが主の道を守り、正義と公正を行うようになるため」ということです。主の道を歩み、正義と公正を行うようになることがあって、初めて強く大いなる国民であり、他の国民に祝福をもたらすことができます。ですから、ソドムが主の正しい裁きの中で、どう推し量られるか？ということなのです。

20 主は言われた。「ソドムとゴモラの叫びは非常に大きく、彼らの罪はきわめて重い。21 わたしは下って行って、わたしに届いた叫びどおり、彼らが滅ぼし尽くされるべきかどうかを、見て確かめたい。」

ここで、アブラハムに語られました。ソドムとゴモラから、罪と不義を行っている声が、叫びのようになって聞こえてくるというものです。すでにロトがソドムに向かって天幕を張っている時に、「13:13 ソドムの人々は邪悪で、主に対して甚だしく罪深い者たちであった」とありました。主は、このようにして、人々のしていることが声として、時に叫びとして聞いておられます。

そして、「見て確かめたい」という言葉も大事です。自分自身でしっかりと見て、確かめるということです。主は公正な方であり、しっかりと事実に基づき、明らかな証拠によって裁かれるということであります。人はしばしば、早まった裁きをします。「箴 18:17 最初に訴える者は、相手が来て彼

を調べるまでは、正しく見える。」私たちは判断を留保して、しっかりと調べてから判断すべきです。

2C　正しい者のゆえの憐れみ　22－33

1D　公正な裁きの訴え　22－25

22 その人たちは、そこからソドムの方へ進んで行った。アブラハムは、まだ主の前に立っていた。

三人のうち、二人がソドムの方に進みます（19:1）。そして残りの一人が、主ご自身なのです。

23 アブラハムは近づいて言った。「あなたは本当に、正しい者を悪い者とともに滅ぼし尽くされるのですか。24 もしかすると、その町の中に正しい者が五十人いるかもしれません。あなたは本当に彼らを滅ぼし尽くされるのですか。その中にいる五十人の正しい者のために、その町をお赦しにならないのですか。25 正しい者を悪い者とともに殺し、そのため正しい者と悪い者が同じようになる、というようなことを、あなたがなさることは絶対にありません。そんなことは絶対にあり得ないことです。全地をさばくお方は、公正を行うべきではありませんか。」

ここまで正直に、訴えることができている自体が、確かにアブラハムは神の友でした。主が、包み隠さず、ソドムのことを知らせただけでなく、アブラハムも自分の思いを主の前にそのまま伝えることができたのです。

そして、主が、正義と公正について考えておられたので、その事に基づいて、ソドムの町を滅ぼすことが正しいのか？と問いかけています。悪者と正しい者が同じように滅ぼされてはいけない、ということです。ここは午前礼拝で学びましたが、信仰によって義と認められた者たちが、神の御怒りから救われるのだとパウロが言っていました。そして、テサロニケ人たちに対しても、第一の手紙でこう言っています。「Ⅰテサ5:9　神は、私たちが御怒りを受けるようにではなく、主イエス・キリストによる救いを得るように定めてくださったからです。」

2D　十人でも全て赦す方　26－33

26 主は言われた。「もしソドムで、わたしが正しい者を五十人、町の中に見つけたら、その人たちのゆえにその町のすべてを赦そう。」

ものすごい、主の寛大さです。ソドムの人たちが何人いたか知らないですが、五十人の正しい人がいれば、すべてを赦すのです。

27 アブラハムは答えた。「ご覧ください。私はちりや灰にすぎませんが、あえて、わが主に申し上げます。28 もしかすると、五十人の正しい者に五人不足しているかもしれません。その五人のために、あなたは町のすべてを滅ぼされるのでしょうか。」主は言われた。「いや、滅ぼしはしない。もし、そ

こに四十五人を見つけたら。」

アブラハムは、少しうろたえています。主が、こんなにも寛大だとは思わなかったのでしょう。それで、交渉を始めています。五十人から五人減らして、四十五人にしています。

29 彼は再び尋ねて言った。「もしかすると、そこに見つかるのは四十人かもしれません。」すると言われた。「そうはしない。その四十人のゆえに。」30 また彼は言った。「わが主よ。どうかお怒りにならないで、私に言わせてください。もしかすると、そこに見つかるのは三十人かもしれません。」すると言われた。「そうはしない。もし、そこに三十人を見つけたら。」31 彼は言った。「あえて、わが主に申し上げます。もしかすると、そこに見つかるのは二十人かもしれません。」すると言われた。「滅ぼしはしない。その二十人のゆえに。」32 また彼は言った。「わが主よ。どうかお怒りにならないで、もう一度だけ私に言わせてください。もしかすると、そこに見つかるのは十人かもしれません。」すると言われた。「滅ぼしはしない。その十人のゆえに。」

なんと十人の正しい人であっても、主は町全体を赦されます。これが、主の心です。ひとりでも、滅びることを願わない方です。今、主が悪い人にも正しい人にも、太陽の恵みを与えているのは、主が忍耐深いからです。

33 主は、アブラハムと語り終えると、去って行かれた。アブラハムも自分の家へ帰って行った。

主は、これからソドムに行かれます。そしてアブラハムは自分の家に戻ります。彼はおそらく、これでソドムの町は赦されるだろうと思ったかもしれません。しかし、十人も正しい人がいませんでした。彼は、この後に起こることを、次の日の朝に見ることになります。

2A ロトへの現れ 19

1B ソドムの不義 1－11

1C 旅人の安全 1－3

1 その二人の御使いは、夕暮れにソドムに着いた。ロトはソドムの門のところに座っていた。ロトは彼らを見ると、立ち上がって彼らを迎え、顔を地に付けて伏し拝んだ。

初めにアブラハムのところから離れて出て行った、二人の御使いです。昼間は、アブラハムの天幕のところでゆったりとしていました。今、夕暮れになっています。

そして、ロトが「ソドムの門のところに座っていた」とあります。イスラエルに行きますと、古代の城壁の跡には、入口には、いろいろな部屋が付いているのを発見します。ある所には、王が座ったと思われる、王座の跡でえ発掘されています。門が、行政や司法を執り行う場となっていたので

す。つまり、ロトはソドムの役人になっていたということです。ソドムの近くに天幕を張り、それでソドムの中に住んでいき、それで王たちの戦争に巻き込まれ、アブラハムによって救出されました。けれども、ロトはその後もソドムに住み、ついに、役人にまでなるという深みに入っていました。

ロトの生涯を見るにつけ、彼は、「主にしっかり立っていないので、世の誘惑に対して力を弱めている人」であると言わざるを得ません。主の約束があったのに、緑地であった低地を選びました。その中で、どんなに自分が神を畏れる証し人として、町の役人のようなことをやっても、証しの力にはならないのです。私は以前、自分自身は教会に行かないのに、自分の親に証しをしてほしいと頼まれたことがありました。自分が主の恵みに留まっていないのに、その矛盾を、親御さんは、しっかりと見抜きます。

2 そして言った。「ご主人がた。どうか、このしもべの家に立ち寄り、足を洗って、お泊まりください。
そして、朝早く旅を続けてください。」すると彼らは言った。「いや、私たちは広場に泊まろう。」3 しか
し、ロトがしきりに勧めたので、彼らは彼のところに立ち寄り、家の中に入った。ロトは種なしパンを
焼き、彼らのためにごちそうを作った。こうして彼らは食事をした。

ロト自身も、アブラハムと同じように、旅人をもてなしています。そして、何かただならぬものを感じたのでしょう。「顔を地に付けて伏し拝んだ」とあります。けれども、御使いたちとロトとの間には、何かアブラハムにあるような穏やかさがありません。「いや、私たちは広場に泊まろう」と、御使いたちが言っていますね。

ロトは、しきりに勧めたので御使いは応じました。ロトは知っていました。もてなしの思いもありましたが、事実、広場に野宿すれば、ソドムの町では非常に危険なのです。

2C 不自然な肉欲 4－11

4 彼らが床につかないうちに、その町の男たち、ソドムの男たちが若い者から年寄りまで、その家
を取り囲んだ。すべての人が町の隅々からやって来た。5 そして、ロトに向かって叫んだ。「今夜お
まえのところにやって来た、あの男たちはどこにいるのか。ここに連れ出せ。彼らをよく知りたいの
だ。」

御使いたちは、おそらくハンサムな若い男性に見えたのでしょう。「よく知りたいのだ」というのは、性的に知りたいということです。町中の男たちが、若い者から年寄りまで、同性愛の強姦を集団で行おうとしているのです。しかも公然に行おうとしている。ここまで、ソドムの町は退廃していました。

このことを、ユダは手紙に次のように記しています。「7 その御使いたちと同じように、ソドムやゴモラ、および周辺の町々も、淫行にふけって不自然な肉欲を追い求めたため、永遠の火の刑罰を

受けて見せしめにされています。」律法にも、「レビ 18:22 あなたは、女と寝るように男と寝てはならない。それは忌み嫌うべきことである。」とあります。レビ記 18 章には、その前後に、近親相姦、また獣姦と並んで、忌み嫌うおのであると書かれています。

パウロの生きていた時代、ローマ社会では、同性愛は当たり前でした。皇帝の多くが、同性愛者また両性愛者です。少年愛は、ギリシアの時代から当たり前に受け入れられていました。しかし、パウロは、はっきりとそれは不自然であると断じます。「ロマ 1:26-27 こういうわけで、神は彼らを恥ずべき情欲に引き渡されました。すなわち、彼らのうちの女たちは自然な関係を自然に反するものに替え、27 同じように男たちも、女との自然な関係を捨てて、男同士で情欲に燃えました。男が男と恥ずべきことを行い、その誤りに対する当然の報いをその身に受けています。」

パウロはユダヤ人であり、聖書を信じているパリサイ派出身です。彼がここで言っている、「自然な関係」とは、明らかに、創造の秩序を意味しています。「創 2:24 それゆえ、男は父と母を離れ、その妻と結ばれ、ふたりは一体となるのである。」これ以外は、神の前に罪です。結婚前に関係を持ったら、律法ではすぐに結婚しなさいと命じられています。結婚後は姦淫と呼ばれて、死刑です。そして、近親相姦や同性愛行為、獣姦は忌み嫌うものとされていました。

しかし、すべての人に福音が与えられています。カナン人は呪われているとされていても、福音書で救われています。アブラハムの祝福の約束は、すべての呪いを受け取られたイエスの十字架によって、信じるすべての人達に与えらえます。そこには、差別がありません。むしろ、福音書を見れば、正しいとされた人々が、悔い改めないために罪が残り、罪人とされている人々が悔い改めているので、義と認められています。福音を受け入れない町々に対して、ソドムの町であれば、とっくの昔に悔い改めていただろうとまで言われます。「マタ 11:23 カペナウム、おまえが天に上げられることがあるだろうか。よみにまで落とされるのだ。おまえのうちで行われた力あるわざがソドムで行われていたら、ソドムは今日まで残っていたことだろう。」主のみわざを見ても信じないカペナウムのほうが、はるかにソドムやゴモラよりも、神のさばきに値するのです。頑なさのほうを、神はもっと、深刻に捉えておられます。

6 ロトは戸口にいる彼らのところへ出て行き、自分の背後の戸を閉めた。7 そして言った。「兄弟たちよ、どうか悪いことはしないでください。8 お願いですから。私には、まだ男を知らない娘が二人います。娘たちをあなたがたのところに連れて来ますから、好きなようにしてください。けれども、あの人たちには何もしないでください。あの人たちは、私の屋根の下に身を寄せたのですから。」

ロトは、彼らを宥めようとしています。ここで恐ろしいことをロトは言っていますね。「まだ男を知らない娘が二人います。娘たちをあなたがたのところに連れて来ますから、好きなようにしてください」とあります。自分の娘たちの価値は、これだけ低かったのです。旅人を守るという高貴な価値観は

あったのですが、それが歪んで、自分たちの女を引き出して守るということです。士師記には、恐ろしいことにこの風習がイスラエル人の間にも入り込み、レビ人が、自分の側女を、自分を凌辱しようとしてやってきた、ベニヤミン人たちの集団に引き出して、彼女は死んでしまったという記述があります（士師 19 章）。かつての軍隊、今もあるかもしれませんが、戦場で強姦が起らないように、慰安所のようなおのを設置しますが、同じような発想でしょう。

ロトは、善良に生きようとしていて、ソドムの人々も受け入れられようと努力していたと思いますが、自分自身がその因習の影響を受けてしまっています。私たちも、世の人に受け入れられて、それで証しを立てようと思う人たちがいますが、結局、主に悲しまれる罪を犯すことになります。

9しかし、彼らは言った。「引っ込んでいろ。」そして言った。「こいつはよそ者のくせに、さばきをするのか。さあ、おまえを、あいつらよりもひどい目にあわせてやろう。」彼らはロトのからだに激しく迫り、戸を破ろうと近づいた。

欲望に対して、宥めても無理です。ただ、よそ者のくせにと言われます。ロトは、受け入れられようとしても、全く意味がなかったのです。塩気のなくした塩は、捨てられるだけなのです。

10 すると、あの人たちが手を伸ばして、ロトを自分たちのいる家の中に引き入れて、戸を閉めた。
11 家の戸口にいた者たちは、小さい者から大きい者まで目つぶしをくらったので、彼らは戸口を見つけようとする力も萎えた。

結局、御使いたちがロトを助けました。

2B ロトの家族の逃れ 12－29

1C かろうじての救い 12－22

12 その人たちはロトに言った。「ほかにだれか、ここに身内の者がいますか。あなたの婿や、あなたの息子、娘、またこの町にいる身内の者をみな、この場所から連れ出しなさい。13 私たちは、この場所を滅ぼそうとしています。彼らの叫びが主の前に大きいので、主はこの町を滅ぼそうと、私たちを遣わされたのです。」

そうです、御使いたちは、ロトとその家族、身内の者たちを救い出すために遣わされたのです。ロトは妥協をしていましたが、しかし内側では、正しい心を痛めていました。「Ⅱペテ 2:8-9 この正しい人は彼らの間に住んでいましたが、不法な行いを見聞きして、日々その正しい心を痛めていたのです。9 主はこのようにされたのですから、敬虔な者たちを誘惑から救い出し、正しくない者たちを処罰し、さばきの日まで閉じ込めておくことを、心得ておられるのです。」

14 そこで、ロトは出て行き、娘たちを妻にしていた婿たちに告げた。「立って、この場所から出て行きなさい。主がこの町を滅ぼそうとしておられるから。」しかし、彼の婿たちには、それは悪い冗談のように思われた。

ロトは、自分は正しい心を持っていても、それを内に秘めていただけでした。だから、自分の周りの人々には、何ら影響を与えることができていなかったのです。多くの人が、自分がイエスを信じている、この方が主であるということを言っていません。周囲の人々に摩擦や対立を起こしたくないと思っているかもしれませんが、それではいつまでも、その人たちが主に立ち返ることはできません。最も周囲の人々を憎む行為は、イエスが主であると信仰告白をしないことです。

15 夜が明けるころ、御使いたちはロトをせき立てて言った。「さあ立って、あなたの妻と、ここにいる二人の娘を連れて行きなさい。そうでないと、あなたはこの町の咎のために滅ぼし尽くされてしまいます。」16 彼はためらっていた。するとその人たちは、彼の手と彼の妻の手と、二人の娘の手をつかんだ。これは、彼に対する主のあわれみによることである。その人たちは彼を連れ出し、町の外で一息つかせた。

ロト自身が、ためらっていますね。ロトの霊的な善悪の感覚が鈍っています。自分自身も、町が滅ぼされるということを、本気で信じられていなかったかもしれません。私たちも、心が鈍っていると、この世が神の御怒りで滅ぼされるという警告を、本気で捕らえていないかもしれません。

けれども、御使いたちは手をつかみました。ロトだけでなく、その妻、そして二人の未婚の娘です。これが、「主のあわれみによることである」ということです。主は、憐れんでくださいます。

17 彼らを外に連れ出したとき、その一人が言った。「いのちがけで逃げなさい。うしろを振り返ってはいけない。この低地のどこにも立ち止まってはならない。山に逃げなさい。そうでないと滅ぼされてしまうから。」

ここは、硫黄と火による裁きですが、津波のことを思い出しますね。一目散に逃げることについては、終わりの日に、荒らす忌まわしい者が聖なる所に立つのを見た時も、エルサレムとユダヤにいる人々は、そうしなければいけないとイエスは教えておられます。

18 ロトは彼らに言った。「主よ、どうか、そんなことになりませんように。19 ご覧ください。このしもべはあなたのご好意を受けました。そしてあなたは私に大きな恵みを施してくださり、私のいのちを生かしてくださいました。しかし、私は山にまで逃げることはできません。おそらく、わざわいが追いついて、私は死ぬでしょう。20 ご覧ください。あそこの町は逃れるのに近く、しかもあんなに小さい町です。どうか、あそこに逃げさせてください。あんなに小さいではありませんか。私のいのちを生

かしてください。」

なんと悠長なことを言っているのでしょうか？その小さな町にも、罪深い者たちがいることでしょう。

21 その人は彼に言った。「よろしい。わたしはこのことでも、あなたの願いを受け入れ、あなたの言
うあの町を滅ぼさない。22 急いであそこへ逃れなさい。あなたがあそこに着くまでは、わたしは何も
できないから。」それゆえ、その町の名はツォアルと呼ばれた。

御使いの一人は、なんと、このことも言うことを聞きます。それだけ、ロトのことを憐れんでいるということです。主は、それだけ一人が救われることを願われて、憐れんでおられます。

2C　硫黄と火の裁き　23－29

23 太陽が地の上に昇り、ロトはツォアルに着いた。24 そのとき、主は硫黄と火を、天から、主のもと
からソドムとゴモラの上に降らせられた。

おそらく夜が明ける前に、この裁きを行われたかったのでしょう。けれども、ロトを待っていて朝日が上ってしまいました。主は忍耐深い方なので、遅すぎるというぐらい待ってくださいます。

そして興味深いのは、主が、天におられる主から硫黄と火を降らせていることです。主が二人いるのか？と思いますね。これは、やはり主の使いが、主ご自身でありながら、父なる神とは別人格である、主ご自身であるということができます。先ほどアブラハムと話していた主ご自身が、ソドムに到着し、この裁きを執行されたのだと思われます。

25 こうして主は、これらの町々と低地全体と、その町々の全住民と、その地の植物を滅ぼされた。
26 ロトのうしろにいた彼の妻は、振り返ったので、塩の柱になってしまった。

今、死海付近を見れば、黄褐色、いやもっと白い色の荒野になっています。手前はユダの荒野、向こう側も、荒野の高地になっています。この時に主が、緑を滅ぼされました。

そして、ロトの妻です。ここの「振り返った」というのは、一回の動作ではありません。何度も何度も、基本的に後ろを見ていたという感じです。だから、ロトよりも遅れているのです。後ろ髪ひかれる、という日本語の言い回しそのものです。彼女は、救いの機会が与えられたのに、世にあるものを愛したので、救われるための悔い改めができなかった人を示しています。

27 翌朝早く、アブラハムは、かつて主の前に立ったあの場所に行った。28 彼は、ソドムとゴモラの
方、それに低地の全地方を見下ろした。彼が見ると、なんと、まるでかまどの煙のように、その地

から煙が立ち上っていた。

アブラハムにとって、この光景は衝撃だったでしょう。彼は、正しい人は十人はいると思って、家に帰りました。けれども結局、ソドムは滅ぼされました。十人もいなかったのです。

29 神が低地の町々を滅ぼしたとき、神はアブラハムを覚えておられた。それで、ロトが住んでいた
町々を滅ぼしたとき、神はロトをその滅びの中から逃れるようにされた。

ロトは、アブラハムの執り成しによって、主が覚えてくださっていました。主の憐れみがロトにありますが、その憐れみは、アブラハムの熱心な祈りによって引き出されていたのです。私たちが、主の前に出て行くこと、執り成すことがいかに重要かを思います。

3B　父と寝る娘たち　30－38

30 ロトはツォアルから上って、二人の娘と一緒に、山の上に住んだ。ツォアルに住むのを恐れたか
らである。彼と二人の娘は洞穴の中に住んだ。

ツォアルは助けられましたが、そこにいるのを恐れたというのは、そこに生き残ったわずかな人々がいるかもしれないと思ったからでしょう。その人たちも悪いので、自分たちを襲ってくると恐れました。それで洞窟の中で住みます。

31 姉は妹に言った。「父は年をとっています。この地には、私たちのところに、世のしきたりにした
がって来てくれる男の人などいません。32 さあ、父にお酒を飲ませ、一緒に寝て、父によって子孫
を残しましょう。」33 その夜、娘たちは父親に酒を飲ませ、姉が入って行き、一緒に寝た。ロトは、彼
女が寝たのも起きたのも知らなかった。34 その翌日、姉は妹に言った。「ご覧なさい。私は昨夜、父
と寝ました。今夜も父にお酒を飲ませましょう。そして、あなたが行って、一緒に寝なさい。そうして、
私たちは父によって子孫を残しましょう。」35 その夜も、娘たちは父親に酒を飲ませ、妹が行って、
一緒に寝た。ロトは、彼女が寝たのも起きたのも知らなかった。

本当に残念なことです。ロト自身も、この娘たちを、あの強姦の集団に引き渡すということ、周囲の因習の考えに影響されていましたが、娘たち本人も、自分たちに与えられた性を軽々しく見ていました。まず、かつてのサラと同じ過ちを犯します。自分たちが子孫を残さなければいけないという、勝手な責任感を抱いています。確かに子孫を残すことは大事でしょう、けれども、父と寝るという、あってはならないこと、道ならぬことを行ってまで残す必要はないのです。しかし、当時、近親相姦は当たり前で、慣わしであったことが、レビ記を見ればわかります。

36 こうして、ロトの二人の娘は父親によって身ごもった。37 姉は男の子を産んで、その子をモアブと

名づけた。彼は今日のモアブ人の先祖である。[38] 妹もまた、男の子を産んで、その子をベン・アミと名づけた。彼は今日のアンモン人の先祖である。

これが、モアブ人とアンモン人の始まりです。モアブ人は死海の東を領地としました。アンモン人は、その北にいました。今のヨルダンの首都アンマンは、まさにアンモンから来ています。この二つの民が、これからイスラエルの民と今後、敵対していきます。もちろんここにも神の恵みがあり、ルツはモアブ人ですが、イスラエルの神を信じて、ボアズと結婚して、その後でダビデが出てきます。

いかがでしょうか？ロトは救われましたが、かろうじて救われました。そして、アブラハムのように約束の子孫ではなく、その約束の子孫に敵対する国民の父祖となってしまいました。かろうじて救われるけれども、報いがないという人について、パウロが、コリントの人たちに語ったところがあります。「Ⅰコリ 3:12-15 だれかがこの土台の上に、金、銀、宝石、木、草、藁で家を建てると、13 それぞれの働きは明らかになります。「その日」がそれを明るみに出すのです。その日は火とともに現れ、この火が、それぞれの働きがどのようなものかを試すからです。14 だれかの建てた建物が残れば、その人は報いを受けます。15 だれかの建てた建物が焼ければ、その人は損害を受けますが、その人自身は火の中をくぐるようにして助かります。」今までの人生が、妥協によって無駄になってしまいます。主が来られる時に、火によって試されますが、自分の働きは焼き尽くされます。けれども自分自身が救われるのです。

しかしそうなりたくありませんね。ペテロは第二の手紙で、御国を受け継ぐ時、その恵みを豊かに受け継ぐことを話しています。「Ⅱペテ 1:10-11 ですから、兄弟たち。自分たちの召しと選びを確かなものとするように、いっそう励みなさい。これらのことを行っているなら、決してつまずくことはありません。11 このようにして、私たちの主であり救い主であるイエス・キリストの永遠の御国に入る恵みを、豊かに与えられるのです。」報いある人生を、信仰の人生を歩みましょう。